

目指す学校像	「笑顔輝く 楽しい学校」 ～ 「凡事徹底」 + 3つのC(Chance・Challenge・Change) = 楽校 ～
--------	--

重点目標	1 主体的・対話的で深い学びの実現 2 豊かな心の推進と安心・安全な教育環境の整備 3 コミュニティ・スクールによる連携・協働体制の構築 4 「凡事徹底」を合言葉に協働共励の組織づくり
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価								学校運営協議会による評価
年 度 目 標				年 度 評 価				実施日令和6年1月18日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○市の学習状況調査において、学習に関する関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ算数・理科で高く、国語・社会で、やや低い学年もある。 ○コンピュータを活用して、学習内容の理解度や興味・関心に合わせて学習することに意欲的に取り組む児童が多い。 〈課題〉 ○全国学力・学習状況調査の全国平均と比べ、国語「書くこと」・「読むこと」の主に記述式の設問について、結果の二極化傾向が見られる。 ○友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることや考えを文章にまとめることが課題である。	・主体的・対話的で深い学びの実現 「学力向上に関する取組」	①「学びのポイント」(じしゃく)を活用した授業を展開し、児童が考えを友達と共有しながら、自身の思考を深めるなど、「主体的な学び」・「協働的な学び」を実践する。 ②5・6年生の教科担任制と3・4年生の学年内交換授業を展開し、きめ細やかな指導を図る。 ③国語について、タブレット端末を効果的に活用しながら文章表現のモデル文を提示し、書く力の向上を図る。 ④ドリルパークやスタディサプリなどのタブレット端末を活用した学習活動を展開し、「個別最適な学び」を実践する。 ⑤「STEAMS TIME」で、プログラミング教育、金融経済教育等を関連付けた探究的な学びを行う単元を創り出し実施する。	①④⑤学校自己評価に係る児童・教員アンケートにおいて、「自ら学び、考えるなど、進んで学習に取り組む」「探究的な学びに向けた授業の工夫」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「分かりやすく教えてくれる」「分かりやすいよう工夫して指導」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ③児童アンケートにおいて、「文を書くことが好き」の肯定的な回答の割合が80%以上となったか。	①④⑤学校自己評価に係る児童・教員アンケートにおいて、「自ら学び、考えるなど、進んで学習に取り組む」「探究的な学びに向けた授業の工夫」の肯定的な回答の割合 →「自ら学び、考えるなど、進んで学習に取り組む」児童92% 「探究的な学びに向けた授業の工夫」教員95% ②学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「分かりやすく教えてくれる」「分かりやすいよう工夫して指導」の肯定的な回答の割合 →「分かりやすく教えてくれる」児童96% 「分かりやすいよう工夫して指導」保護者97% ③児童アンケートにおいて、「文を書くことが好き」の肯定的な回答の割合 →72%	A	○「学びのポイント」(じしゃく)を意識した授業実践を今後も継続することで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させていきたい。そのために、来年度の学校課題研修では、個別最適な学びと協働的な学びの研究に取り組む。 ○今年度の反省をもとに、改善を図りながら、来年度も教科担任制を継続する。 ○協働力を高めていくことで、子どもたちのコミュニケーション力が高まっていくのではないかと考える。そこで、ICTを効果的に活用しながら、協働的な学びを推進し、他者の考えや学びを共有し、自分の考えや学びを深め、発信する力を育成していく。	○授業を拝見して、子どもたち同士による教え合いやグループでの話し合いなどが活発に見られ、どの学級でも協働的な学びが展開されていた。今後も充実させていってほしい。 ○タブレット端末の修繕に時間がかかるのは、子どもたちの学習に支障をきたすので、何とか改善してほしい。 ○タブレット端末の日常的な活用により、子どもたちの情報モラルやリテラシーを育成していく必要がある。
2	〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査において、「人が困っているときには、進んで助けている」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国平均を上回った。 ○2年前と比べ、昨年度は、けがで保健室に来室する児童、医療機関を受診した児童は減少している。 〈課題〉 ○学校自己評価に係る児童アンケートにおいて「悩みや困ったことが起きた時、誰かに相談できる」の項目に否定的な回答の割合が、他の項目と比べ高く、継続してより深く多面的な児童理解と適切な支援を行う必要がある。 ○児童が自ら危険を予測したり、回避したりする力を育むことが課題である。	・豊かな心の教育の推進 「安心・安全に関する取組」 ・安心・安全な教育環境の整備 「安心・安全に関する取組」	①代表委員会を中心とした「あいさつ運動」と豊かな仲間意識を育む異学年集団による交流活動を展開する。 ②「考え、議論する道徳」の授業づくりを推進し、道徳教育・人権教育の充実を図る。	①学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「あいさつ」「友達と仲よく生活」に関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「よさを見つけ認め伸ばす指導」に関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「あいさつ」「友達と仲よく生活」に関連する項目の肯定的な回答の割合 →「あいさつ」児童88% 保護者83% ②学校自己評価に係る児童・保護者アンケートにおいて、「よさを見つけ認め伸ばす指導」に関連する項目の肯定的な回答の割合 →児童94% 保護者95%	A	○あいさつ運動は、児童主体に行われ活発である。また、保護者によるあいさつ運動も効果的である。しかし、あいさつ運動日以外のあいさつに課題がある。今後も、3者によるあいさつ運動を充実させ、課題を解決していきたい。 ○「ハッピータイム」の取組を充実させていくことで、協働力、思いやりの心などの非認知能力を育成する。	○学校評価の教育相談の項目について、およそ2割の児童が否定的な回答をしており、相談先がないことについて心配している。学校における、心と生活のアンケートと面談の実施、「いのちの支え合い」を学ぶ授業など、相談しにくい児童への対応や児童の相談スキルの育成の取組については評価できる。担任が、児童の状態をよく把握して、適切に対応してほしい。 ○「ハッピータイム」はよい取組である。今年度は、それに加え、全校スマイルランチにも取り組み、充実が図れた。今後も、継続してほしい。
3	〈現状〉 ○昨年度、学校運営協議会において、「与野南小コミュニティ・スクール構想図」「与野南小コミュニティ・スクール概要図」を策定することができた。また、学校運営協議会を主体とした「あいさつ運動」を実施することができた。 〈課題〉 ○「与野南小コミュニティ・スクール構想図」「与野南小コミュニティ・スクール概要図」の具現化を図る必要がある。	・コミュニティ・スクールによる連携・協働体制の構築 「開かれた学校づくりに関する取組」	①学校運営協議会の情報を学校だよりや学校HPで積極的に発信し、取組等を広く、家庭・地域と共有する。 ②「与野南小コミュニティ・スクール構想図」「与野南小コミュニティ・スクール概要図」の具現化を図り、学校、家庭、地域の取組を推進する。 ③児童の発達や学びの連続性・多様性を理解し、与野南中学校教員による教科指導や学校行事の連携・協力事業を展開する。	①②学校自己評価に係る保護者・教職員アンケートで、「学校運営に関して、学校・保護者・地域が連携・協働して、子どもたち成長を支えている」と回答する割合が85%以上となったか。 ③「小1プロブレム」「中1ギャップ」の解消に向けた、保幼小連携及び小・中一貫教育の取組を充実させることができたか。	①②学校自己評価に係る保護者・教職員アンケートで、「学校運営に関して、学校・保護者・地域が連携・協働して、子どもたち成長を支えている」と回答する割合 →保護者99% 教員100% ③「小1プロブレム」「中1ギャップ」の解消に向けた保幼小連携の取組 →「小中一貫」引渡し訓練実施。小中合同研修会の実施(スクールロイヤー講演)「保幼小」1年生と園児との交流会実施、保幼小連絡協議会実施予定(1月末)	B	○子どもたちのコミュニケーションにおける課題について、3者で共有することができた。今後、コミュニケーション力の育成の具現化を図り、取組を推進していく。 ○小・中一貫教育の取組は今後も継続し、充実させていく。「小1プロブレム」の解消に向けた保幼小連携の取組について、今年度の取組以外で新規にできるものはないか検討をしていく。	○子どもたちのコミュニケーション力の低下について、コロナ禍で影響を受けた低学年が心配である。また、子どもたちの中には、トラブルを避けようとするあまり、人との関りを過度に避けようとする傾向もみられる。人はトラブルを経験することにより、次にどう行動するのか学ぶ。異学年交流や協働的な学びを行うことの意義がそこにある。
4	〈現状〉 ○ICTの活用方法について、エバンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○T・Tや合同授業により、多面的な児童理解や多様な指導方法を学び合うことができた。 〈課題〉 ○ICTの活用については、誰もが学び続けることができる職場環境づくりが求められる。 ○担当外の教科について、教材研究をしたり、よい授業のイメージを共有したりすることが課題である。	・「凡事徹底」を合言葉に協働共励の組織づくり 「教職員の資質向上に関する取組」	①「主体的な学びをつくる授業づくり」をテーマに、外部指導者を招聘した校内研修を実施する。 ②低中高学年ブロック・本部に1人ずつエバンジェリストを配置し、エバンジェリストからの個別最適な学びにおける各教員への課題提示と各教員の授業実践を行う。	①各教員が、授業改善の目標を基に指導者を招いた授業公開を年間1人1回実施する。 ②学校自己評価に係る教員アンケートで、「ICT機器の活用を意識した授業を行っている。」と回答する教員の割合が、90%以上となったか。また、授業実践を年3回以上実施できたか。	①各教員が、授業改善の目標を基に指導者を招いた授業公開を年間1人1回実施 →学校指導訪問を活用し、授業公開を年間1人1回実施。外部指導者を招聘した校内研究授業会を年4回実施。 ②学校自己評価に係る教員アンケートで、「ICT機器の活用を意識した授業を行っている。」と回答する教員の割合と授業実践 →アンケート：90% 授業実践：公開授業で1回、日々の授業において、日常的に活用できている。	B	○教員の主体性をより大切にしたい新しい研修の在り方を模索し実施していく。研修を通して「自律的に学び続ける力」「新たな課題に対応できる力」「協働的に課題解決できる力」を育成し、教職員の資質向上につなげていきたい。	○方策の評価指標が、「B」ということだが、学校の課題に対して、教職員同士が協働しながら、教育活動にあたっていることはとても良いことである。児童だけでなく、教員の協働力も向上していってほしい。